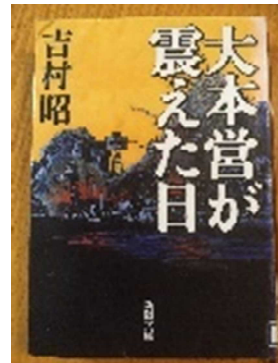


第百五十九話 薄氷・僥倖の第一段作戦！

吉村昭著「大本営が震えた日」（新潮文庫 407p）を一気に読了した。1941（S16）年 12 月 1 日の御前会議で、12 月 8 日対米英蘭開戦の断が下ってから戦端を開くに至るまでの 1 週間、陸海軍第一線部隊の極秘行動の全てを、事実に基づき再現した作品である。

大部隊による南方作戦及び真珠湾奇襲攻撃成功は、一に企図の秘匿に掛かっていた。本書を読んでみると、陸海軍が如何に周到に準備したとはいえ、奇襲に成功したのは奇跡に近い状況だったことが解る。正に薄氷の第一段作戦成功だったのである。400p の内容を簡単に紹介する筆力はないが、敢えてそれに挑戦してみよう。



1 機密文書所持参謀搭乗機の不時着

支那派遣軍司令官への香港攻略命令文書携行参謀が搭乗した中華航空機「上海号」が、12 月 2 日中国正規軍の支配地内山中に不時着した。開戦命令書や暗号書等が敵手に渡れば、日本軍の奇襲は成立し得ないものと大本営等は焦慮を強めた。通信傍受・解読、航空機による偵察・墜落機の破壊、確認・救出のための「地上部隊の派遣、諜報員の派遣等々のあらゆる手段を尽くし状況把握に努めた。殆どの乗員が死亡する中、当該参謀他 1 名が運よく生存、中国軍の追及から辛うじて逃れ、やっと日本軍に保護され、開戦命令書の処分を実施したとの報告で、大本営も安堵した。

2 南方作戦部隊の行動秘匿

南方方面上陸作戦部隊は、輸送船で集結地点に前進開始した。英軍の「総員外出禁止命令」や定期的哨戒実施指示等を傍受し、すわ企図が暴露したかと驚いた。準敵国の商船遭遇時には日本軍船団と遭遇しないよう指示し、念を入れて通信設備の破壊をも行った。敵潜水艦の何回かの出現も憂慮すべき事態だった。寺内大将の行動も秘匿し、またマレーの英軍の動向も、上陸地点付近の気象状況も気がかりであった。作戦地域の情報収集には特に力を注いだ。新鋭戦艦と巡洋戦艦は作戦部隊にとって大なる脅威であった。戦艦対処用の日本の機雷敷設艦 3 隻の行動も安全という訳ではなかった。蘭、英空軍機が接近し、開戦前の撃墜をも覚悟せざるを得ない状況であった。英爆撃機の偵察機を撃墜できず、企図が暴露したのではと危惧され、敵機来襲も懸念される事態となった。更にはタイ国には平和進駐を企図していたのだが、首相の所在も時間が迫る中当初不明で、辛うじて、日本軍隊通過の黙認を認めさせ得た。

3 真珠湾奇襲攻撃

連合艦隊の単冠湾集結に先立ち、防諜対策のために海防艦を派遣して処置し、真珠湾カラハイナ泊地かの判断、集結艦艇、湾内状況等の EEI 解明の為に数名の士官を送り込み、以前から配置されていた諜報員との連携を密にし、学校練習性を各海兵団員に偽装しての東京見物や九州方面からの大量発信等、偽通信、機密に触れた者の日記等の没収・開戦日までの軟禁、等考えられる限りの処置をした。ハワイから帰国する大洋丸（重要情報秘密携行）に対する米軍の厳しい検査による出港遅延はあったものの逃げ切り、機動部隊を支援する艦艇では艦長のみで作戦を承知させる等徹底的な秘密保持に努めた。厳しい気象条件の中、単冠湾集結部隊との連絡要領にも工夫を凝らし、機動攻撃部隊のコース選定の工夫、徹底的な電波管制・封止をした。先遣部隊艦艇の米海軍艦艇との遭遇は冷汗百斗であったが、米軍も接触を嫌っていたのか日本軍から離れていった。ソ連商船との遭遇の可能性があった。幸運にも敵の哨戒圏を見事に掻い潜り得た。

* 史上最大の作戦とも云うべき対米英蘭戦の第一段作戦は上述 1, 2, 3 項で要約した通り、正に薄氷を踏む思いであった。大本営が震えた日との形容は実態を捉えている。

奇襲成功の要件は、準備の周到、企図の秘匿、対応の暇を与えぬこと等であるが、それが幸運にも結実したのが今作戦である。余りにも完璧な成功が後々悪影響？

（第百五十九話 了）